

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 46 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹さんの『ねじまき鳥クロニクル』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『ねじまき鳥クロニクル』 感想文

村上春樹の「ねじまき鳥クロニクル」を第2部まで読んだ。半年前に読書会で読んだ新作の「騎士団長殺し」と設定が対照的であり、「騎士団長殺し」では妻に突然離婚を申し出られ、主人公が家を出ることから物語が始まるのに対して、「ねじまき…」では唐突に妻がいなくなり、後から別れを告げる手紙が来る。

本作では冒頭から妻がいなくなるのではなく、電話の女や笠原メイ、加納姉妹など不思議な人々との出会いが妻の失踪前からすでに起きている。

いなくなる妻というのは作者にとって大きなテーマのようで、それまで妻を表層的、あるいは一面的にしか見ていなかったこと、夫婦で一緒に道を歩んできたと思っていたのにどこかで道が分かれていたということに妻と離れてから事後的に気づかされる。また、登場する不思議な登場人物たちとの出会いや体験は最終的に夫婦の復縁、絆の再生へと繋がっていくのだろう。

その他にも村上作品の長編に見られるように、さまざまな素材が散りばめられており、例えば間宮中尉の語るノモンハンの挿話は読んでいながら別の作品を読んでいるような感触を受けた。物語の中にいくつもの物語の筋が流れているといった感じだ。

見た夢の内容が現実と繋がっていたり、「僕」と綿谷ノボル、クミコと入れ替わりにクミコの服を着て部屋で寝ている加納クレタなど表裏のような対応関係、戦時中に敵兵に井戸に閉じ込められた間宮中尉と自ら進んで井戸に入って笠原メイに囚わらずも閉じ込められてしまった「僕」といった歴史の反復などが星座のようにも見える。

分厚くて一人だとなかなか読み通せない作品なので、まだ最後までは読めていないが、この機会に読めてよかったです。

(おわり)

『ねじまき鳥クロニクル』感想文

「流れというのが出てくるのを待つのは辛いもんだ。しかし待たねばならんときには、待たねばならん。そのあひだは死んだつもりでおればいいんだ」

理由は、よく分かりませんが一番印象に残った文章です。

私は最初、オカダトオルがクミコと別れようとしないうちに、必死で話をしようとしていて、それは逆効果でクミコの気持ちが変わるまで待てばいいのにと考えていたけど、そうではなくてクミコは戻りたくても戻れないという事が、オカダトオルには分かっていたんだなと思えて少し納得できました。

クミコは助けを求めようとしていた事が分かってホッとしましたし、クミコと元のように暮らす事が出来ればいいなと思いました。

あと、読んでいて怖い場面がいくつかありました。

とくに牛河が出てくる所は恐怖を感じました。

ああ、また馬鹿の牛河が何かやってると思って…という所は、似たようなセリフがどこかであったなあと思うと少しクスツとなりましたがそれ以外は、不気味な感じがしました。

夢の中か、心の世界なのかは分からなかったのですが、オカダトオルがテレビでワタヤノボルを襲った犯人としてテレビのニュースで流れた時、殺そうとは思っていてもまだ実行はされていないはずなのに周りの人たちは殺人犯だと信じる所が、みんなが信じればそれは真実になってしまう怖さを感じました。

きっと私はすでに騙されてるのかもしれないなと思いました。

(おわり)

ねじまき鳥クロニクル 村上春樹 感想文

「僕」のような人は、世の中たくさんいる。ような気がする。

人はみな多少の差はあれど、生きていれば悩みはあり、平穏に見えていても闇だって少しは持っている。僕は、愛している妻の「闇」を、結婚前から気づいていながら、自分たちの問題として考えず、解決しないままに過ごしていた。いくらでも時間はある、と思っていた。

「本当に愛していた？」

笠原メイが質問せめにしそうだ。

僕は、本当に妻を愛していたと言えるのだろうか。妻もまた夫と向き合ってこなかった。そういう夫婦は実は世の中にたくさんいるんじゃないかと思う。

この2人には家族も友人も介入してこない状況にあり、夫婦2人という最小限の単位で暮らしていた。猫がいなくなるとはじめて、僕に関わる人間が増える。予定のない毎日にいくつもの小さな事件が起き、登場人物の過去が語られる。

妻がいなくなった理由＝闇は綿谷ノボルである。その象徴である権威主義やいわれなき暴力と、僕は戦う。井戸の底からつながるあちら側の世界へ進めば進むほど、それは痛みを伴いながら。

引き継がなくてはならない痛みの経験を私たちはいつまで見ないふりして、同じことを繰り返すつもりなのかという警鐘として聞こえてくる。

権威や暴力はどの時代にも底辺に流れ、抵抗しなくてはならない。綿谷ノボルも皮剥ぎボリスも好き勝手にさせてはならないのだと、作家は言っている。

2009年エルサレムの文学賞授賞式でのスピーチ。

もし、硬くて高い壁と、そこに叩きつけられている卵があったなら、私は常に卵の側に立つ。そう、いかに壁が正しく卵が間違っていたとしても、私は卵の側に立ちます。何が正しくて何が間違っているのか、それは他の誰かが決めなければならないことかもしれないし、恐らくは時間とか歴史といったものが決めるものでしょう。しかし、いかなる理由であれ、壁の側に立つような作家の作品にどのような価値があるのでしょうか。

もし猫が出て行ってしまったら、水の涸れた井戸へ降りてゆく決意を、自分は持っているかどうか確かめながら読み終えた。

大丈夫。私たちには、考えるきっかけを与えられている。村上春樹という作家と同じ時代に同じ日本人として生まれたことをあらためて感謝している。

だって、こんな長くて深い物語、翻訳じゃなくて原文でちゃんと読みたいもの。って笠原メイの声が聞こえる。
(おわり)

『ねじまき鳥クロニクル』 読書感想文

この超長編は、目が離せないうちに何も明確な答えはないままフェードアウトします。

飽きない仕掛けでたくさんの方が書かれてあるので、一人だけの読書としても十分に楽しめる作品ですが、読後どうしても人と『ここって、どう思う?』と話をしたくなります。

もしかして、読書を通じて人と人をつなげることを目的とするため、わざと作品解説も付けず、作者自身も作品についてあまり語らないのかな、とも思いました。

『ある種の思考のシステム、その一面性、単純性の故に反駁不可能なものになってしまう。』『何かがはっきりとわかるまで、自分の目でものを見る訓練をした方がいいと思う。たっぷりと何かに時間をかけることはある意味では一番洗練された形での復讐なんだ』という記述が本編にあります。

答えが正しい正しくないは置いておいて、自分自身でみっちり考える力を身に付けて欲しいというメッセージに、この小説自体がなっているのかなと思いました。

不肖牛河、一皮むけば綿谷先生と同類で食わせ物で下種いと自分で言っていますが自分でものを考える力があり、そして行動もしています。語り口調もひょうきんで、「慮る」能力はピカイチだと思いました。

次を目論見、お世話になった? 綿谷ノボルを裏切るような真似をしてからドロシします。

一見愛嬌があり憎めませんが、その後あちらこちら行脚するんだとしたら綿谷ノボルより、厄介な存在だと思いました。映画だったらラストシーン、牛河の薄笑いのアップで終わりそうだと思います。

「自らの状態を知るといのは、それ程簡単なことではありません。例えば人は自分の顔を自分の目で直接見ることはできません。鏡に映して、その反映を見るしかないのです。そして我々はその鏡の映し出す像が正しいと経験的に信じているのです。」のような、こころに刻みたくなるセリフが其処彼処に散らばっています。

最後に子供の名前にコルシカはすごいセンスだと思いました。

(おわり)

『 水のない井戸 』

ある日、私の友人がボヤいていた。

「私がスマホを置きっぱなしにしても、旦那は何の興味もないんよ！私は、旦那のスマホは気になるのに。少しは気にしてほしいじゃん。見られても何も無いけどさ。」

一見、何てことないボヤキだが、岡田亨の妻に対する感じもこうだったかもしれない。

「信用している」と「興味がない」は、心の奥では大差があっても、行動では僅かな差だ。亨は、クミコを信用していた。しかし、綿谷ノボルの件を抱えていたクミコは、複数の男と関係を持った。本当にシンドい時は、「信用」ではなく、コミットしてほしいのだ。クミコを失って初めて亨は井戸に降りて、自らと向き合う。

この小説の登場人物は、みんな一人で生きていける、もしくは一人で生きてきた人物ばかりだ。しかし、どこかで思い残しや闇を抱えている点でも共通している。

本田伍長、間宮中尉しかり、加納姉妹や笠原メイ、シナモン・ナツメグ親子に牛河等、それぞれが亨と関わることで、自らが救われ、亨自身もクミコを取り戻す。クミコも綿谷ノボルの世界に移っていたが、亨の「君を連れて帰る」との強い意志にノボルと決着をつける。どっちにしても植物状態のノボルだったが、とどめをさす事が彼女の乗り越え方だったのだろう。間宮中尉も、自らはクミコのようにボリスに決着をつけられなかったが、亨に話すことで人生に意味ができた。それぞれ、自分一人で決着をつけることは難しいのだ。

罪を認めることで、クミコは亨と当分離れ離れたが、決してバッドエンドだとは思わない。遠回りだが、確実に亨の元に戻ってこれた。水が戻ったのも何をいわんやだ。亨は死にそうだったけど(笑)

笠原メイも、社会不適合者の匂いがプンプンだったが、亨と関わることで無事に社会に戻れた。社会や人間同士の関わりぐらい、面倒なことはない。私も、実感している。でも、やはり「結びつき」は大事なのだ。大事に感じるものは、大事にしたほうがいい。亨の二の舞にならないように。

私も、大切な人くらいコミットしていけたらと自らを戒める。それが自らを救うことにもなるのだから。

最後にエマーソンのこの言葉が沁みる。

「人は、自分の人生を支配する最高の権利を持っている。」

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「井戸でやり過ごす」

保守とリベラル(革新)の対立軸というのが、日本の戦後政治を動かしていたが、2017年10月になって、その対立軸がそもそも仮象だったと思わざるをえない光景が広がっている。

『ねじまき鳥』の綿谷昇という人物は、まさに日本の保守政治家の欺瞞が凝縮したような人間だ。日本の保守の中には、戦前の朝鮮半島や満州での植民地経営に携わっていた政治家の流れを組む人たちがいる。日中戦争にも深く関わっていた人たちだ。

GHQの逆コースによって、ある流れをくむ保守系政治家たちは安全保障権益を隠れ蓑に反共保守というかたちで生きのびて、日本の戦後復興と繁栄を推進してきた。綿谷昇もまさしく、その流れにある政治家として描かれている。

綿谷昇の不気味さというのは、戦後保守の不気味さそのものだ。

「なぜ人間が戦争をするのか？」という問題について社会心理学者エーリッヒ・フロムの著作に、鋭い分析がある。

資本主義のある段階には、極端な能率主義(合目的主義・功利主義)が現れる。カント風と言えば「人間を目的としてではなく手段としてみる」傾向である。あるいは「最大多数の最大幸福」であり、人間を数=numberに還元する考え方だ。

生きた人間を手段として、つまり数としてみるというのは、つきつめれば、死体を数えるようなものだ。大量虐殺も、強制収容所も、無謀な総力戦による玉砕も、結局は生きている人間を死体と同じく数として捉える能率主義から生まれる。

好戦的な政治家は、死体愛好家に極めてよく似ている、とフロムは指摘していた。(『悪について』)

生きている人間の皮を剥ぐのも、バットで脳漿を飛び散らせるのも、人間を数として、あるいは、死体としてみていれば、造作のないことなのだ。国民を数として、有権者を数として、その数の足し算引き算で、政治を動かすこと。いわば、死体によるチェスである。

綿谷昇のような保守政治家が数の論理で動くと、政局は死体が踊りだす『かんかんのう』に似てくる。

暴力による抑圧と軍靴の蹠音が脳裏にちらつく。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343